HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	資源空間の変容をめぐる人びとの抵抗と順応 : 沖縄の事例から［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙﨑, 優子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13417号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74357
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Takasaki_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　髙﨑　優子

学位論文題名
資源空間の変容をめぐる人びとの抵抗と順応－沖縄の事例から－

・本論文の観点と方法

本論文は、沖縄の 3 つの地域を事例に、人と自然環境の関係の総体がどう変動してきたのか、そして、その中で地域住民たちがどのような対応をしてきたのか、について環境社会学的に論じたものである。沖縄本島の周辺部に当たる今帰仁村古宇利島、国頭村安田集落、うるま市浜比嘉島という 3 つの地域がそれぞれ個別に抱える問題について、「環境保全」や「自然資源管理」と呼ばれる問題群を中心に、歴史的な記述を積み重ね、そこから、地域社会のあるべきすがた、人と自然の関係のあるべき姿を考察する、というのが本論文の目的である。

以上の目的のもと、本論文では、長期にわたる徹底したフィールドワーク（2009～2018 年の延べ 330 日）を敢行し、そこで得られた参与観察の記録や聞き取りデータを質的データとして分析し、さらには史資料（市町村史、字誌、集落内資料、漁協資料、公文書、新聞記事、書籍、論文、報告など）も網羅的に利用した。その結果を詳細な叙述と考察によって構成したのが本論文である。

・本論文の内容

本論文は 7 章から構成されている。

第 1 章では、本論文の目的と方法が述べられる。環境社会学における資源管理やコモンズの議論を批判的に振り返りながら、筆者が寄って立つ視点、すなわち、代替不可能な存在としての個々の生と、その上に成り立つ地域社会の多声性を踏まえた形で人と自然のこれからを考える、という視点が議論される。

第 2 章では、沖縄県今帰仁村・古宇利島の漁業資源管理を事例に、管理主体（漁業協同組合と漁民）が一見不合理な資源管理を行っている様子とその背景が分析される。そこからは、彼らが、地域社会に埋め込まれたコンテクストの中で、管理の失敗も許容しつつ、交渉を重ねながら、個々人のありようを損ねることなく資源管理の妥協点を見いだしていることが明らかになる。そのことが、資源との決定的な決裂を防ぎ、資源管理の弾力性を支えていると論じられる。

第 3 章と第 4 章では、沖縄県国頭村安田集落を事例地とし、自然資源と地域社会の関係の変化やその意味について考察される。第 3 章では、地域社会と山との関係を、王府

時代から近代にかけて、戦前から戦後にかけて、さらに現代、と順に記述され、そこから以下のことが明らかにされる。王府時代、山は王府に帰属したが、同時に集落の人びとによって継続的に働きかけられる資源でもあった。そして近代に移行して山をめぐる制度が変わったとき、住民たちは「山稼ぎ」を成立させることで山との関係を維持した。戦後は、戦前に成立していた「共同売店」を再興させ、共同売店のしくみと山稼ぎとを組み合わせることで、山との関係を維持しつつ利益を得、さらにその利益の一部を集落全体に還元するしくみも作り上げた。しかし、次第に山との関係は薄れ、山は「貴重な自然」へと変化していった。

第 4 章では、同安田集落において、ヤンバルクイナ保護の動きに対して地域社会がどう反応したかが記述・分析される。1981 年のヤンバルクイナの「発見」以降、「ヤンバルクイナ保護」の動きが外からやってくる。集落の一部は、停滞する集落の起爆剤になることを期待してこの保護の動きを積極的に受け入れるが、それが集落内にコンフリクトを呼ぶ。もともと「アガチ」という名でヤンバルクイナの存在を知っていた集落の人びとにとって「希少種保護」という流れには違和感がある。しかし一方で自分たちで自然や希少種を語る言葉がなく、違和感やコンフリクトはただ「不満」として沈殿していく。外からの「希少種保護」を自分たちの文脈で読み替えるということができない、いわばコンテクストの不在という問題がそこに存在していることが明らかにされる。

第 5 章と第 6 章は、沖縄県浜比嘉島を事例とし、海の資源と地域住民との関係が論じられる。第 5 章では、ある古老漁師が記憶する海の微小地名を記述することで、当該地域の海と人の関係がどのようなものであったのか、その詳細が明らかにされる。同時に、古老漁師から認知地図を引き出す作業そのものの困難を記述し、そこから、漁民たちの海の認知のしかたが「順路型」であることなどが明らかにされる。

第 6 章は、現在浜比嘉島の漁業の大方を占めるモズク漁の歴史について、石油備蓄基地開発や橋梁開発への抵抗や順応とからめながら記述される。開発の現実の中での選択としてモズク漁へのモノカルチャー化が進み、空間のシンプリフィケーションが進んだこと、しかし、ハーリー（船競漕）という装置によって、それによるリスクを共同で回避しようとする営みが存在していることが明らかにされる。さらにこの章の最後には、前章の古老漁師の地図をめぐる親子の対話を取り上げることにより、シンプリフィケーションが進んだ空間認識から抜け出していく若い漁師の様子を描き、そこから、「空間の潜在可能性」を見出すことの重要性について議論される。

第 7 章では、全体の結論が述べられると同時に、「空間の潜在可能性」と「聞く」ことの意義が改めて議論される。